



日本のエネルギーがここにあった。

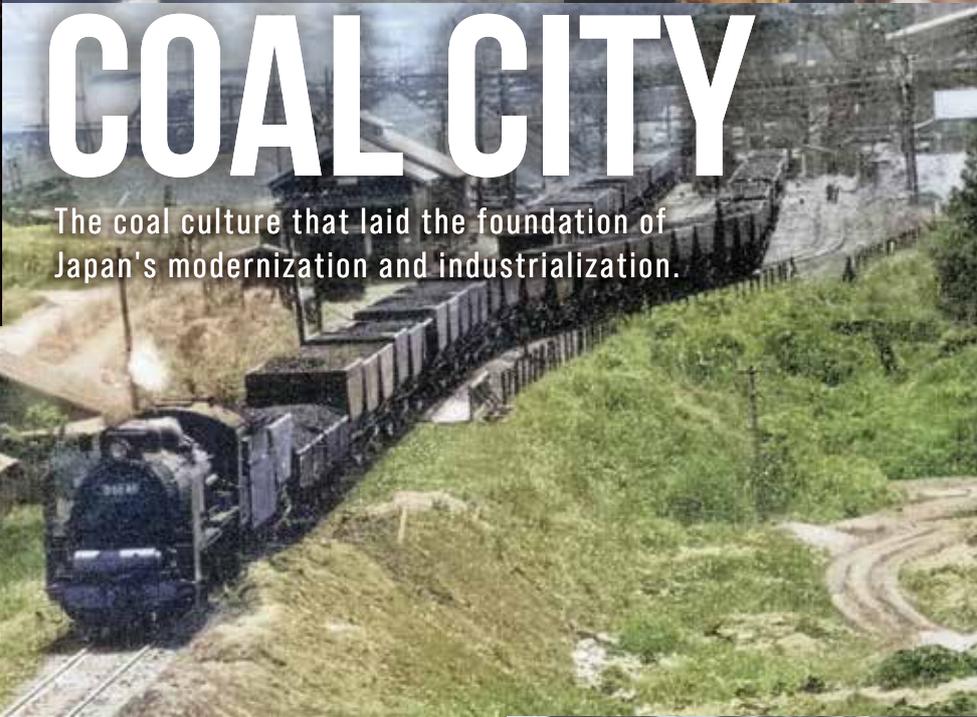
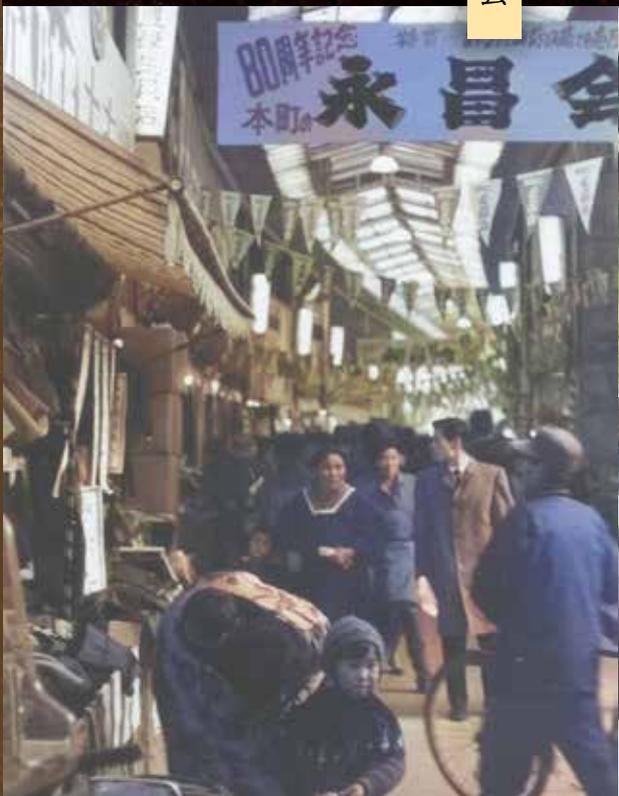
日本近代化産業の礎を築いた石炭文化

筑豊炭都物語

一般社団法人 飯塚観光協会

TALES OF CHIKUHO'S COAL CITY

The coal culture that laid the foundation of Japan's modernization and industrialization.



100カラットの輝き 黒ダイヤ

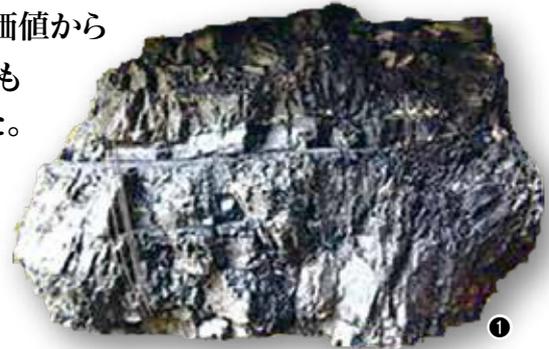
100-Carat Black Diamond with Brilliant Shine

01

石炭とは

今から6000~2500万年前の新生代第三紀という時代に、筑豊地方は沼地や湿原地帯が多く、熱帯性植物のメタセコイアやカエデ、クルミなどの大きな木が繁茂していました。これらが、地殻変動により地中や水中に堆積・腐敗泥炭化し、長い年月を経て地熱や地圧によって蒸し焼きされる炭化作用を受けて、燃える石すなわち石炭ができたと言われています。石炭は炭化作用の温度や圧力などの状態差で、亜炭、褐炭、瀝青炭や無煙炭など種類に分かれます。筑豊では火山岩の侵入により「せん石」（天然コークス）や無煙炭も多く、また石炭になり損なった珪化木（「松岩」や「ゲッテン岩」とも）も見られました。

日本の近代化を支えたエネルギー石炭は、その資源的価値から**黒ダイヤ**とも呼ばれました。



- ① 石炭（黒ダイヤ）
- ② 石炭のもとになったメタセコイアの木（庄内の旧キャンプ場付近：筑豊原色図鑑より）
- ③ 石炭の樹（田川市石炭・歴史博物館所蔵）



燃える石、石炭の発見

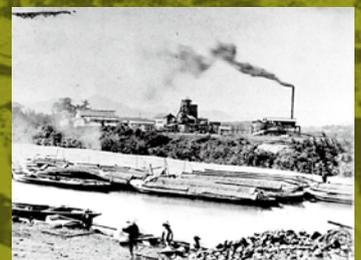
石炭（燃える石）の発見は1469年（文明元年）に、三池炭田のあった、三池郡稲荷山（現在の福岡県大牟田市）が最初の例と言われています。筑豊では、それより10年後の1478年（文明10年）に五郎太夫という人が遠賀郡植生村にて石炭を発見したのは始まりと言われています。

江戸期以降、筑豊の各地でも発見されて、農民やきこりたちが地表に近い石炭を必要に応じて掘り出し、家庭用燃料として薪や木炭の代用に使用していたと思われます。江戸期（元禄16（1703）年）の地誌で貝原益軒『筑前国続風土記』には「焼石、遠賀・鞍手・嘉麻・穂波・宗像郡の所々の山野にこれあれ、遠賀と鞍手殊のほか多し、そのころ糟屋郡の山にても掘る。烟多く臭悪しといどもよくもえて火久しくあり、水風呂のかまにたきて尤もよし、民用に便あり、薪なき里に多し、是造化自然の助也」と記されています。しかし、石炭を燃やすとあまりに悪臭がするので敬遠されていたようです。江戸時代の学者 司馬江漢（『江漢西遊日記』）が飯塚宿に宿泊し、石炭を火鉢に入れて使用した際の印象を「とにかくくさし」と記している。そのため、石炭（焚石）を蒸し焼きにした「ガラ」<石炭（いしずみ）や燃石（やけいし）とも>に加工して、かがり火や暖房用の火鉢などの家庭用燃料として博多の町などでも盛んに利用されたようです。

石炭の輸送は、遠賀川の水運を利用し、川舩（かわひらた）、あるいは御平太船（五平太船）と呼ばれる川船で、芦屋や若松に運び、ここで大型の船に積み替えて福岡・津屋崎など福岡方面や中国、四国地方の塩田に送り、また大阪にまで販路を広げていきました。



石炭を焚く図
『江漢西遊日記』
（地図と絵で見る飯塚地方誌より）



小竹町御徳炭坑の川舩
（九州歴史資料館所蔵
筑豊工業高校資料）

石炭掘りは、 狸掘りから始まった

江戸期の石炭採掘は狸掘り（手掘りで掘り、人力で坑外に掘り出す方法）でした。

1) 石炭の運び出しは馬によって採炭切羽（きりは）（坑内で石炭を掘る場所のこと）から水平坑道、斜坑口までの運搬を担いました。

2) 人力から機械採掘へ近代化が進み、石炭の大量生産化がなされていきました。

排水・運搬の機械化：杉山徳三郎らのスペシャルポンプの導入や、石炭運搬機械、採掘現場での機械化導入が押し進められていきました。そして切羽では石炭層を切り崩すドラムカッターなど大型採掘機械による採掘が行われるようになり、大量出炭につながりました。

3) 斜坑から堅坑へ：筑豊の炭坑は斜坑が多い。通気と運搬の問題があり、堅坑（櫓）の増加となっていきました。

4) 掘られた石炭の選別が選炭場で行われ、使えない石炭は捨て石（硬＝ボタ）として積み上げられたのがボタ山です。



江戸時代の採掘
（兵庫信一郎著「炭坑読本」より）



昭和30年以後鉄柱、
平型コンベヤ採掘
（麻生の記憶遺産より）



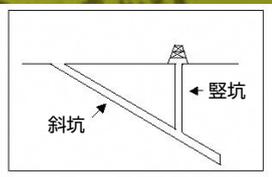
大正時代の坑内水平坑道の馬匹運搬
（直方市石炭記念館所蔵）



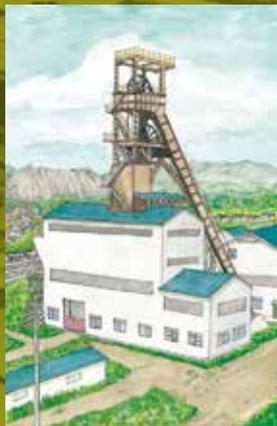
切羽における採炭作業
（明治時代の人力採炭）
（九州歴史資料館所蔵
筑豊工業高校資料）



明治炭鉱斜坑の坑口
（昭和10年頃）
（筑豊の100年より）



斜坑と堅坑の関係を表わす図



麻生鉱業 吉隈炭鉱第一堅坑
（麻生の記憶遺産より）

筑豊の名と 筑豊炭田のおこり

筑豊炭田は、嘉麻川、穂波川、彦山川など遠賀川流域全体に広がり、東は福智山から香春岳に連なる山地に、西は孔大寺及び三郡山地、南は熊ヶ畑山を構成する花崗岩域、北は遠賀川河口の響灘に面する遠賀郡、鞍手郡、嘉穂郡、田川郡（現在の福岡県北九州市、中間市、宮若市、直方市、鞍手郡、飯塚市、嘉麻市・嘉穂郡桂川町、田川市、田川郡）にまたがる日本でも主要な石炭の産地として栄えました。

筑豊の由来はまたがる地域の旧国名、筑前国と豊前国の頭文字をとったものであり、明治時代以降、炭鉱地域、石炭を背景にして新しく生まれた地域区分名です。明治18（1885）年、自由掘（狸掘り）の弊害から規制、行政指導が必要となり、鉱区の整理、技術の向上などを目的に、福岡県令「石炭坑業人組合準則」に基づいて、筑前国遠賀郡、鞍手郡、嘉麻郡、穂波郡と豊前国の田川郡の5郡の同業組合である「筑前国豊前国石炭坑業人組合」が発足したことに始まります。翌、明治19（1886）年に「筑豊五郡川歸同業組合」が設立され、筑豊の略称が初めて使用されました。明治26（1893）年に石炭坑業人組合は「筑豊石炭鑛業組合」と改組され、「筑豊炭田」など筑豊の呼称や地域認識も徐々に広まりました。現在は、福岡県の4地方区分（福岡・北九州・筑豊・筑後）の1つで、特に県央の中核都市に成長した飯塚市、直方市、田川市の3都市は筑豊三都と呼ばれます。



筑豊鉱業組合直方会議所
（現 直方石炭記念館）



遠賀川流域の
大手炭鉱の位置図
（田川市石炭・
歴史博物館所蔵）

筑豊炭田はすごかった

明治2（1869）年に政府は鉱山を解放することになり、筑豊炭田も福岡藩・小倉藩などの管理から漸次民間に移っていきました。明治5年には「鉱山心得書」が公布され、明治6年に日本坑法が施行されて、政府や民間企業も炭鉱の調査、開発に相次いで乗り出しました。明治に入ってから政府の殖産興業政策の推進、鉄道や鉄鋼・機械工場・電力産業の整備、八幡製鐵所の設立、日清戦争・日露戦争などを背景に、三井、三菱、住友、古河など財閥企業・大手資本の進出や石炭採掘の機械化により、筑豊炭田の開発は急速に伸び、その生産は全国石炭の50%以上をこの炭田から掘り出したこともあるなど戦前日本では最大の炭鉱地帯でした。

石炭が 生み出した 郷土の傑物

02

～筑豊御三家と炭鉱王～

The Remarkable Local Figure Born from Coal

写真：田川市石炭・歴史博物館所蔵

炭鉱王



伊藤 伝右衛門

1860～1947

万延元年穂波郡幸袋村（飯塚市）に貧困家庭の長男として生まれ、父伝六の炭硯開発と共に炭坑経営の道を歩み、幾多の困難を乗り越え中鶴炭硯を開坑、

大正3年大正炭業を設立して成功を収め御三家に並びました。

また明治34年嘉穂銀行取締役（現福岡銀行）、明治36年衆議院議員に当選し、遠賀川大改修工事を完成させました。明治43年には、嘉穂郡立技芸女学校（後嘉穂高女、現嘉穂東高校）を創立し伊藤育英会や幸袋職工学校を創設するなど教育に力を注ぎました。



蔵内 次郎作

1847～1923

弘化4年現築城町で生まれ、明治16年弓削田村（田川市）で石炭採掘を始め、明治35年峰地炭坑（添田町）を短期間で開発に成功しました。大正9年には、

年出炭量59万トンを記録し、石炭長者と言われました。また明治41年衆議院議員になって、連続4回当選しました。そして、田川中学校（現田川高校）の設立、小倉鉄道の建設にも尽くしました。

筑豊御三家



貝島 太助

1844～1916

弘化元年直方で貧農の子として生まれ、8歳の頃から坑内で働き、裸一貫の坑夫から叩き上げた「筑豊御三家」の中でも最も立志伝中の人といわれています。

明治18年大之浦（宮田町）の開発に着手して、貝島炭鉱の基礎を築きました。以後各地に炭鉱の拡張を図りながら、一方私財を投じ私立の大之浦、満之浦、菅牟田小学校等を創立し、貝島育英会を組織して学資補助を行うなど従業員子弟の教育に力を注ぎました。



安川 敬一郎

1849～1934

嘉永2年福岡藩士徳永家の四男として生まれ、明治7年炭坑業に身を投じ、兄松本潜と共に炭坑事業の拡張を図り明治炭業を創業、明治・赤池・豊国・平山

等の炭坑を経営しました。

また明治29年若松築港会社の会長として若松港の整備に力を注ぎ、明治35年赤池炭山学校、同40年戸畑に明治専門学校（現九州工業大学）を開校するなど様々な業界の発展に尽くしました。



麻生 太吉

1857～1933

安政4年嘉麻郡立岩村（飯塚市）の庄屋の長男として生まれ、明治5年父賀郎とともに目尾御用炭採掘より石炭事業に入り、鯉田・忠隈などの名山を開発。

その後上三緒、吉隈等の炭坑により麻生産業を興しました。また、飯塚病院の創立をはじめとして、電気、セメントなど多くの事業を経営し、各業界の発展に尽力しました。

明治32年衆議院議員、明治44年貴族院議員（現参議院）に当選、政界でも活躍しました。



03

石炭が もたらした 食と文化

The Culinary and Cultural Legacy of Coal



- ①千鳥饅頭
- ②すくのかめ
- ③ひよ子饅頭
- ④成金饅頭
- ⑤羊羹黒ダイヤ

娯楽 と食

炭鉱労働者は、映画、音楽、演劇などの娯楽や料亭・食堂での飲食、商店街での買い物、公園・緑地、遊園地での行楽、祇園山笠など地域の祭りを楽しみました。特に筑豊の炭鉱町には劇場や映画館が多数あり、大衆文化が開花しました。

炭鉱が閉山し、ほとんどの劇場・映画館がなくなっていく中で、江戸期の歌舞伎小屋の様式を残し、今でも現役の嘉穂劇場（現在整備中）は貴重な文化遺産として市民に親しまれています。

炭鉱の仕事は激務で、身体の疲れを癒やすため、またエネルギー補給に炭鉱労働者は甘い物を求めました。家庭では頂き物やお土産、お供え物の菓子を大変喜んだといいます。筑豊では、「千鳥饅頭」「すくのかめ（さかえ屋）」「ひよ子」「成金饅頭」「黒ダイヤ」など多くの名菓が誕生しました。また、交通・物流の発達した筑豊には、山海の珍幸が各地から集まり、おいしいものを食べさせる味わいのある飲食店も多くあって、「宵越しの銭はもたない」「女房を質に入れてでも人にご馳走する」といった人をもてなす気風（川筋気質）と、贅を尽くした炭鉱関係者の舌を肥えさせた街の味、食文化も多く残っています。

月が出た出た
月が出た出た
うちの炭坑（おやま）の
上に出た
あんまり煙突が
さそやお月さん
サノヨイヨイ



炭坑まつり
TAGAWA
コールマイ
フェスティバル

豊かな 生活文化

炭鉱経営者は働く人々が仕事・生活しやすいように福利厚生、教育・文化活動の充実に力を注ぎました。

福利厚生面では、住居（炭坑住宅）、光熱・水道費、食料などの配給が行われ、購入の際は配給所（購買部）で一般価格より割安に利用できました。

医療では、特に麻生鉱業の炭鉱病院であった飯塚病院は、現在筑豊の総合病院として地域医療に広く貢献しています。

また、教育でも学校への寄付や校舎の寄贈、学校の設立、育英会による奨学金、学費補助などにも尽力しました。伊藤伝右衛門の設立した郡立技芸女学校（後の県立嘉穂高女、現在の嘉穂東高校）、伊藤育英会や貝島太助の貝島育英会などは有名です。

そして集会所や文化会館など文化施設を建てて、封切りの映画や演劇などの娯楽の提供を行い、文芸や書画、音楽などの文化活動を支援しました。今でも筑豊では地域の文化活動が盛んで、嘉麻市、田川市、直方市には美術館もあります。飯塚市では毎年飯塚新人音楽コンクールが開催されるなど炭鉱で育まれた豊かな文化が受け継がれています。野球場・テニス・バレーコートなどスポーツ施設も整備し、余暇の充実や健康増進を推進しました。



おがたチューリップフェア



飯塚新人音楽コンクール



嘉穂劇場

飯塚市 IIZUKA-City

石炭 ゆかりの 観光スポット +関連施設

Tourist Spots Associated with Coal

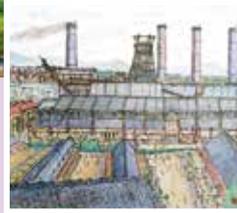
目尾炭坑跡

目尾炭坑跡は明治5年に開坑、明治13年に杉山徳三郎が所有しました。翌14年に筑豊で初めてスペシャルポンプを活用した蒸気機関による排水に成功し、石炭鉱業の近代化を推し進めていく契機となった重要な炭坑です。また、明治初期以降において川舩から鉄道への石炭運搬の変遷を追うことができます。発掘調査の結果、蒸気機関による排水に成功した竪坑を覆うコンクリート製蓋とその竪坑から出る排気を外に出すための扇風機の煉瓦積台座、汽缶場・発電所関連の八角形煙突や円形煙突の基礎、給水ポンプ座や排水管台座などを確認しました。※現在は埋め戻されています。



飯塚市 歴史資料館

国の重要文化財に指定されている立岩遺跡の出土品をはじめ縄文、弥生、古墳時代の出土品や中国西安市から寄贈された秦始皇帝兵馬俑などが展示されています。「くらしと文化」をテーマとして、飯塚地方の近世から近代までを(1)農村のくらし、(2)長崎街道、(3)石炭の時代に分けて紹介しています。「石炭の時代」では、川舟から鉄道に替わる石炭輸送の変化を、川ひらた模型・舩石・船頭寄進物・鉄道関係資料などで紹介するとともに、石炭の採掘について、手掘り時代の実物大ジオラマ・山本作兵衛炭坑記録画・炭鉱で使用された道具などを展示し紹介しています。また、伊藤伝右衛門と歌人柳原白蓮のコーナーを設置し、当時の炭鉱経営者たちの生活の一端を紹介しています。



直方市 NOGATA-City



旧堀三太郎邸 (直方歳時館)

筑豊を代表する炭鉱主の一人と呼ばれた堀三太郎が、明治31年(1899年)に1,088坪の広大な敷地に建てた延べ床面積150坪の純和風の木造建築です。「子孫の為に美田を残さず」と昭和16年に市へ寄贈し、現在は生涯学習施設「直方歳時館」として、茶会、講演会やイベント等に利用されています。(再築 平成10年)



旧十七銀行 直方支店 (アートスペース谷尾)

大正15年に旧十七銀行直方支店として建てられた建物で、煉瓦造2階建、レンガ張りのレトロな外観と風格は当時の姿を今に残しています。建設当時は、屋根にドームを載せた建物でした。平成9年に谷尾欽也氏により直方市美術館別館(通称アートスペース谷尾)として生まれ変わりました。

旧奥野医院 (直方谷尾美術館)

大正時代に建てられた旧奥野医院を、レトロな外観はそのままに改装した「直方市美術館(直方谷尾美術館)」。



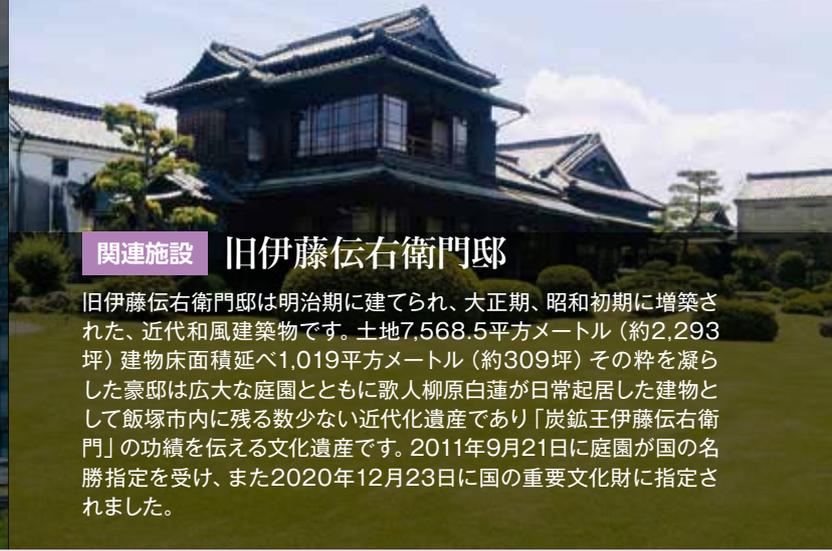
直方市 石炭記念館

本館は、明治43年に「筑豊石炭鉱業組合」の事務所として建てられた建築物で、現在は筑豊炭田の歴史を伝える資料館として活用されています。本館、別館、科学館からなる施設内には、写真や絵画、模型などのほか、実際に使用されていた蒸気機関車や掘削用大型機械など貴重な資料を多数展示。炭鉱災害時の罹災者救出並びに復旧作業を行うための目的で作った救護隊の練習坑道が、筑豊100年の炭鉱の歴史を伝えるために残っています。メタセコイヤ(石炭の木)もあります。



住友忠隈炭砒のボタ山

炭鉱町として発展した飯塚にその時代の面影を残す数少ないものが、忠隈のボタ山です。3つの峰からなり、高さ141m、113m、138m、周囲2km、底部面積26万㎡、総容量677万㎡あります。現存する平地ピラミッド型ボタ山としては日本最大級。別名「筑豊富土」とも呼ばれ地域のシンボルとして残っています。「ボタ」とは、九州地方の炭坑で使われた言葉で、選炭し後に残る石や坑内から掘り出された岩石のことです。それらを半世紀近く積み上げて出来たこの山は、10トントラック70万台分の量が現在3連の山として残っています。炭鉱全盛期の頃は不夜城のように照明が灯り稜線が日に日に高くなるのが見られました。



関連施設 旧伊藤伝右衛門邸

旧伊藤伝右衛門邸は明治期に建てられ、大正期、昭和初期に増築された、近代和風建築物です。土地7,568.5平方メートル（約2,293坪）建物床面積延べ1,019平方メートル（約309坪）その粋を凝らした豪邸は広大な庭園とともに歌人柳原白蓮が日常起居した建物として飯塚市内に残る数少ない近代化遺産であり「炭鉱王伊藤伝右衛門」の功績を伝える文化遺産です。2011年9月21日に庭園が国の名勝指定を受け、また2020年12月23日に国の重要文化財に指定されました。

三菱飯塚炭砒 巻き上げ機台座



市指定有形文化財 巻き上げ機台座（三菱炭鉱第二本卸）とは、巻き上げ機を据え付けた基礎のことで、通常、斜坑は並行して2本開削され、本卸坑道は入気、石炭の搬出、連卸坑道は排気及び人道に使用されます。この巻き上げ機は大正時代末～昭和初期に作られたと考えられ、上部の動力部分は残っていないため詳細は不明ですが、蒸気の力により稼働していたといわれています。筑豊では、現在でも斜坑の巻き上げ機台座は、各所に残っていますが、明治・大正のものは煉瓦製、戦後はコンクリート製のものが多いようです。この巻き上げ機台座は筑豊最大級で、操業時は勇壮な外観で人々を驚かせたことでしょう。

関連施設 嘉穂劇場



1922（大正11）年、嘉穂劇場の前身「中座」が麻生太吉の弟・太七を社長とし、炭鉱主、町所有者の共同出資により、大阪の中座をモデルにして建てられました。しかし、1928（昭和3）年5月漏電による火災で全焼、ただちに再建されるも、わずか1年後の1930（昭和5）年7月に台風で倒壊してしまいました。1931（昭和6）年に現在の嘉穂劇場が伊藤隆氏により落成。木造2階建て入母屋造り。間口15間（約27m）奥行23間（約42m）特徴的なトラス形式の小屋組みで出来ています。間口の大きな梁を構成することで、柱を使わずに建てられた1,200人を収容する客席は、この地がかつて炭鉱で栄えていたからできたといえる贅沢な空間です。平成18年11月29日国登録有形文化財

田川市 TAGAWA-City

田川市石炭・歴史博物館

1983（昭和58）年に「田川市石炭資料館」として開館し、開館当初から博物館への移行を見据えた活動を行い、2005（平成17）年に名称を「田川市石炭・歴史博物館」と改めました。博物館が所蔵する資料総数は約2万点におよび、このうち1万5千点が石炭資料です。2011（平成23）年に世界記憶遺産に登録された山本作兵衛氏の炭鉱記録画及び記録文書697点のうち、記録画585点、日記等記録文書42点については博物館が所蔵し、その一部を展示しています。石炭資料のほか全国的に著名な考古、歴史資料も所蔵・展示しています。第1・第2・第3展示室、野外展示場、産業ふれあい館からなっています。



旧三井田川鉱業所伊田堅坑櫓

総高28mで、筑豊に残る唯一の鋼製櫓で、現存する明治期の堅坑櫓として最大級の規模を誇っています。

旧三井田川鉱業所伊田堅坑 第一・第二煙突

第一煙突は、堅坑櫓より約120m南方に位置する高さ45m（150尺）の煉瓦造形煙突です。第二煙突は第一煙突から約25m西に位置し、高さは第一と同じです。現存する明治期の煉瓦煙突として最大級の規模を誇っています。2本の煙突が象徴するのは、炭坑節発祥の地。煙突は、その巨大さが建設当時の人々に驚きを与え、炭坑節に「…あんまり煙突が高いので…」と歌われて、後世に伝えられました。



筑豊の石炭遺産マップ

筑豊炭都物語

日本近代化産業の礎を築いた石炭文化



石炭は郷土筑豊の誇り

TALES OF CHIKUHO'S COAL CITY

The coal culture that laid the foundation of Japan's modernization and industrialization.

石炭がなくなって50数十年、筑豊は情報産業の創造などによって新しく生まれ変わろうとしています。筑豊の石炭が過去に日本の近代化を支え、わが国を大きく発展させた力になったことに誇りを持ち、後世に石炭のことを伝えましょう。現在、筑豊では、各地市町村が合併して大きく変わろうとしています。石炭の宝庫であった遠賀川流域に住んでいる人々が、地域の歴史を学び、それを教訓にして、誇りと自信に満ちあふれた活力ある筑豊の新しい街づくりを、若い力で推進して行くことを願って関係団体・市町村の協力のもと、この『筑豊炭都物語』を制作しました。

参考資料

- 1) 筑豊原色図鑑：写真
- 2) 田川市石炭・歴史博物館：写真・資料
- 3) 地図と絵で見る飯塚地方誌
- 4) 直方市石炭記念館：写真・資料
- 5) 九州歴史資料館所蔵 筑豊工業高校資料：写真
- 6) 兵庫信一郎 著『炭坑読本』：資料
- 7) 香月靖晴監修『筑豊の100年』：写真
- 8) 『もっと知りたい遠賀川』：写真・資料
- 9) 長弘雄次 著『筑豊の石炭に生きた日々の記憶』：写真・資料
- 10) 深町純亮 著『伊藤伝右工門物語』：資料
- 11) 『麻生の記憶遺産』：麻生浩平氏 画
- 12) 平田和幸氏：写真

制作協力

飯塚市歴史資料館
直方市観光物産振興協会
田川市観光協会

お問合せ先

一般社団法人 飯塚観光協会

〒820-0040 飯塚市吉原町6-1 あいタウン2F
TEL.0948-22-3511 FAX.0948-22-2528
E-mail:otoiwase@kankou-iizuka.jp
http://www.kankou-iizuka.jp

